

記事を想像し組み版 続・ソウル五輪

■新編集講座 ウェブ版 第133号 2019/10/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

前回に続き、1988年秋のソウル五輪で紙面カラー化が一気に進んだ話です。当時のスポーツ面をご覧ください＝図①。陸上女子100メートルで優勝し、星条旗を持って走るフローレンス・ジョイナー選手＝右欄参照＝の写真のほか、見出しやカット、ケイ線にカラー素材が用いられ、現代の新聞と遜色ありません。でも当時の技術では、カラー写真の色分解も、カラーと白黒が混在した組み版も、時間がかかりました。大阪本社の若手編集者だった私には、冷や汗の日々だったのです。

■「C版」「M版」「Y版」三つの原版

前回のおさらいをしておくと、カラー写真を印刷するには、その写真を「色の三原色」である水色(Cyan)、赤紫色(Magenta)、黄色(Yellow)に分解する作業が必要でした。逆に言えば、三原色のインキがあれば、世の中にあるほぼ全ての色を紙面に再現できるのです（光沢のある色や「白」を刷るには、特別のインキが必要です）。

色分解の際は、紙面に掲載するサイズを考えて作業します。同じ写真でも、切手大、はがき大、便せん大では、細かな部分の再現度合いが変わってくるのはご理解いただけると思います。

そして、その写真を紙面のどの位置に配置するのか、そのページ全体の設計図を基に、印刷用の原版（刷版）を三つ（三原色の頭文字から「C版」「M版」「Y版」と呼ぶ）を作るのです＝図②。

■ 記事や見出しで「墨版」を作成

新聞紙面は、記事や見出し、写真、地図、表など多種類の素材で構成されています。理論上は、これら全てをカラー化できます。でも、ソウル五輪の時代は、色分解に数時間を必要としました。現実問題として、締め切り時間ぎりぎりに飛び込んでくるニュースを掲載するには、記事や見出しは白黒で扱うしかなかったのです。

当時のカラー紙面作成は、「C版」「M版」「Y版」の製作から始まりました。発注時点で、サイズと掲載位置を決めないといけません。その後、組み版端末に向かい、カラー写真を掲載する位置を「空白」で押さえた上で、残りのスペースを使い、記事や見出しを組んでいき白黒部分（「墨版」と呼ぶ）を完成させます＝図③。

そして、「C版」「M版」「Y版」と「墨版」の計4枚の刷版を輪転機に装着し＝写真④、これを印刷すると、カラー写真入り紙面が完成する＝図⑤、と言ってしまうえば簡単なのですが……。



（上）①
1988年9月26日
毎日(大阪)朝刊
スポーツ面

（下）②
カラー写真を色
分解し、刷版を
作る模式図

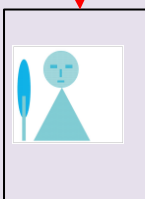


フローレンス・ジョイナー選手

1959年生まれの米国の陸上選手。ソウル五輪の際、100メートル、200メートルと400メートルリレーで三冠を達成したほか、カラフルなユニホームや染めた長いツメなど、ファッションの面でも人気を集めました。

1998年、心臓の病気のため、38歳の若さで急死しました。

夫のアル・ジョイナーさん、義妹のジャッキー・ジョイナー・カーシーさんも、五輪の金メダリストです。



C版(水色)

M版(赤紫色)

Y版(黄色)



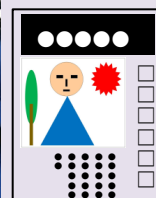
空白

墨版(黒)

（左）③ ソウル五輪当時、組み版端末では、カラー素材の位置を「空白」で押さえ、残り部分に記事や見出しを入れ、「墨版」を作りました。



（左）④最新のアルミ刷版を輪転機に装着する光景(ソウル五輪当時は樹脂製でした)



紙面

（左）⑤C版を水色、M版を赤紫色、Y版を黄色、墨版を黒色のインキで刷ると、カラー紙面が完成

■ 角地に置くのが無難

先ほど申し上げた通り、この時代、カラー処理に時間を要したため、締め切りの数時間前にカラー写真の位置やサイズを決める必要がありました。例えば1面の場合、その後に大事件や政変が起きる可能性を考えれば、いくらその可能性は低いといっても、五輪のカラー写真をトップに置くのは度胸がいります。多くの場合、五輪カラーは紙面の左上角に配置。五輪の記事は、他のニュースとの兼ね合い次第で、トップでも、二番手以下でも、自由に組めるようにしたものです。

これがスポーツ面になると、一般ニュースを考慮する必要はなく、五輪写真は好きに配置できます。でも、記事量が分からなかったり、他の競技でハプニングがあったりするのを心配する編集者もいます。「無難に運ぼう」と考えると、たとえジョイナー選手の「金」でも、紙面の左上に置き、組み版の自由度を高めたくなるのです＝図⑥⑦。

■ 躍動的で美しい紙面を

その点、当時の大阪本社整理部（現・編集制作センター）は意欲的でした。「スポーツ面にふさわしく、躍動的で美しい紙面を」作ろうと決意。「写真は思い切り大きく」「見出しもカラーに」「カラーケイやカットを多用して立体的な紙面に」などの方針を打ち出しました。

かけ声は立派ですが、実務者は大変です。ジョイナー選手の例だと、見出しやカット、ケイ位置を考え、複雑怪奇な空白部分を設定＝図⑧。残り部分で組み版をしました。特派員の原稿量は、来てみないことには分からず、「長ければ、要点だけに削る」「短ければ、関連の通信社電を追加する」との方針（というか、出たとこ勝負）で臨みました。

見出しカラーも難題でした。原稿が来る前に考えるわけですから。テレビ中継やインタビューを参考に、原稿の狙いを想像しました。ジョイナー選手は「笑顔」がキーワードなので、比較的すんなり決定。見出しの背景色を、写真の中の星条旗の青色とそろえました＝図①。

■ 日本最先端だったカラー紙面

その見出しの色ですが、単に「鮮やか」という理由で決めるのではなく、写真との調和を心がけました。別の日の水泳でも、見出しの背景色は、プールと同じ水色で、波の模様も入っています＝図⑨。

これは、写真や見出し、カットがばらばらに自己主張御するのではなく、全体で完成度の高い紙面を作るのが狙いです。さまざまな楽器から成るオーケストラが一つの曲を奏でるようなものでしょうか。

またカラー素材自体も、結果待ちである競技写真だけでなく、事前に仕込みが利くグラフ作成にも力を注ぎました。例えば、「鳥人」と呼ばれた棒高跳びのブブカ選手の世界記録推移です＝図⑩。

手前みそになりますが、本社のカラー能力は、日本新聞界のトップランナーでした。当時の部長に識見があったからだ、と考えています。私が目標としたこのリーダーの資質は、別の機会に取り上げましょう。

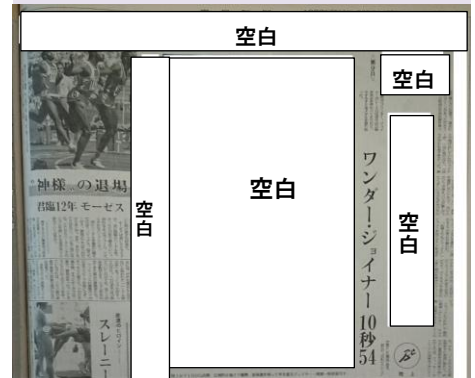


(上) ⑥88年9月26日の毎日(東京)朝刊スポーツ面（縮刷版が白黒保存のため、「たぶんカラー写真だった」という想定で試作

(下) ⑦その場合の「墨版」。空白部以外は、自由に組み替えが可能



(下) ⑧同じ日の大阪紙面の「墨版」。組み替えの自由度はほとんどなく、担当者は苦勞



(左) ⑨88年9月22日 毎日(大阪)朝刊スポーツ面
カラー見出しは水色で、波の模様も見えます



(左) ⑩ 同29日
ブブカ選手のグラフは事前準備のためもの